

類人猿ボノボ

在コンゴ民主共和国日本国大使館

類人猿ボノボといえ、ヒトに最も近いサルと言われますが、野生での生息地は、世界でもコンゴ民主共和国のみです。1983年からボノボ研究を続ける古市剛史氏によれば、ボノボの特徴は「平和的」であることだと言います。

チンパンジーは、発情したメスを巡ってオスが争うなど、集団での殺し合いや争いをよく起こすのに対して、ボノボは外見こそ似ていますが、そういった争いをほとんど行いません。なぜこのような違いが生じるのかが研究のテーマです。

古市氏の仮説によれば、それはコンゴの中央を流れ世界2位の流域面積を誇る巨大なコンゴ川と密接に関連していると言います。なぜなら、チンパンジーとボノボの生息域は、この川の南北ではっきりと分断されているからです。

コンゴ川が、3400万年前に成立して以降、ヒト科の動物（ヒト・ゴリラ・チンパンジー）はみな、川を渡ることができず北側にとどまっていた。しかし、およそ100万年前と180万年前に一時的に乾燥して水深が浅くなったことが判明しており、その時、チンパンジーとボノボの共通祖先のきわめて小さな集団が渡河し、後に独特の進化を遂げてボノボになったと同氏は考えています。その証拠に、その後ボノボは川の内側の湿潤な熱帯雨林で暮らし、湿地林も多く利用するためかチンパンジーと異なり水を怖がりません。

また、同氏が指摘するボノボの特徴は、「メスがオスと同等以上の社会的地位についていること」そして「社会関係でメスがイニシアティブを握っていること」だと言います。それにより、オスが集団を独占しようとする風潮が生まれず、積極的な交わり合いの社会となるため、平和的な社会になるとのことです。同氏は、ノーベル平和賞の受賞者に女性が多い事実を挙げ、社会が平和になるための女性の役割の重要性を強調しています。